

令和5年度第2回（第12期第1回）さいたま市社会教育委員会議 会議録

開催日時：令和5年11月20日（月）10時00分～11時30分

開催場所：別館2階 第4委員会室

出席者名：【委員】若原 幸範議長、石川 敬史副議長、石崎 敬吾委員、
今川 夏如委員、加藤 美幸委員、佐野 操委員、
澁谷 知範委員、関根 広美委員、永井 正委員、
藤田 成司委員、吉沢 浩之委員

【事務局】（教育長） 竹居 秀子
（生涯学習部） 辻 美由紀
（生涯学習振興課）辰市 健太朗、田原 佑介、石田 悦子、
伊藤 智美、清宮 雅貴
（生涯学習総合センター）中村 和哉
（資料サービス課）野村 明子

欠席者名：井上 久雄委員、小林 玲子委員、鶴ヶ谷 柊子委員、林 弘樹委員

公開・非公開の別：公開

傍聴人の数：なし

1 開 会

2 委嘱状交付

3 挨拶

挨拶後、教育長は公務のため退出した。

4 正副議長選出

委員より、議長に若原委員、副議長に石川委員の推薦があり、承認された。

5 議 事

(1) 社会教育委員会議及び生涯学習ビジョンの概要について

さいたま市社会教育委員会議及びさいたま市生涯学習ビジョンの概要について、資料1に基づき説明した。

(2) 第11期さいたま市社会教育委員会議の提言について

第11期さいたま市社会教育委員会議の提言の内容について資料2に基づき説明した。

【意見・質疑応答】

<議 長>

本提言の作成には2年をかけ、委員の皆様には定例の会議以外にも集まっていたり、くなど本当に熱心にご議論いただきました。ワークショップでも多くの方にご報告いただき、事務局の尽力もあり形とすることができました。第11期の議長として改め

て感謝申し上げます。

<加藤委員>

改めてご説明を伺い、とても良いまとめができたという感想を持ちました。提言の内容は多岐に渡りますが、ぜひ教育委員会が音頭を取り、実現に向けて働きかけていただきたい。

<副議長>

ワークショップの記録が非常に具体的で、委員が活発に議論されたことが伝わってきました。社会教育委員会では以前からこのようにワークショップが行われ、様々な現場の方とアクティブな意見交換が積み重ねられているのでしょうか。

<事務局>

協議テーマはもちろん、協議の方法も含め、基本的に1期2年間の進め方は委員の話し合いの中でご議論いただいています。

以前は事務局で資料を作りそれに対して意見をもらうやり方もありましたが、近年は様々な学習現場に赴いたり、逆に学習活動をされている方に来てもらったり、また委員の皆様からも意見を出しやすいよう、ワークショップを含めて様々な方法を模索しています。

(3) 第12期さいたま市社会教育委員会協議内容について

第12期さいたま市社会教育委員会協議において協議する内容について、資料3に基づき事務局案を提示した。

<関根委員>

近頃市等で行われる講座を見ても、割と高齢者には手厚い気がしています。

一方で子育て中や働いている方などは、なかなか地域とのつながりも作りにくいので、働く世代の方に対してアプローチは必要だと思っています。

どうすればこの人たちに届くのかは重要な課題ですので、ぜひ進めていただきたい。

<議長>

高齢者の元気づくりは社会教育の大きな課題ですが、様々なアプローチがすでにされている分野でもあります。一方、若い世代がどう生涯学習や、まちづくりに関わっていくのかは非常に難しい課題であり、取組みが十分に進んでいないことは第11期の提言づくりの中でも議論されました。そこに今期は取組みたいという提案です。

<佐野委員>

土・日の講座に親の学習ファシリテーターとして参加すると、平日仕事をしている保護者、特に父親の参加が最近多くなったと感じます。今回の提言で挙げられた内容にも、既に定着しつつある部分があります。

小学校のチャレンジスクールに参加してみると、校長をはじめとした地域の方々が自分の培ってきたものを子どもたちに伝えていくということが、私が住んでいる地域では素晴らしく定着しています。

私の活動するお囃子の会でも、今年は高校1年生の若い子がとてもバリアフリーな感じに入ってきてくれました。小学生のころからチャレンジスクール等地域の場において、地域の方々に見守られて育ってきている意識と、地域に目を向けるという視点を持ち、郷土芸能に参加してくれる若い世代がいるようです。教育委員会の努力もあり、生涯学習ビジョンの理念は確実に動き始めていると感じます。

またボランティア団体として公民館文化祭に参加する機会もありますが、地域の方が触れ合ったり、子どもたちがお年寄りの作っているものを見て世代間交流したりするなど、つながりづくりが一步ずつ着実に歩んでいると感じます。

ただ、「働く世代」の30代40代の方がつながっていくためにはどうすればいいか、自分の娘が今働きながら子育てをしているのもあり、課題に感じていました。

なので、働く世代の市民が生涯学習に参加しやすくなるためにはということは、素晴らしいテーマとなると思います。

<議長>

働く世代の生涯学習は大きな課題ですが、すでに蓄積がある分野も出てきているようです。私自身も幼稚園児の子どもがおり、子育て関係の公民館講座等に参加することがありますが、思った以上に若いお父さんが参加しているのが見受けられます。そういう意味で関心は高まってきており、子育てのように先行した分野もあります。

この後、ワークショップや視察などを通してそのような分野に学びながら、つながりをどう広げていくのかは重要な課題となるでしょう。

<澁谷委員>

まず、1点目。「働く世代の市民に生涯学習を届けるために」というテーマは私自身もその世代の1人としてとても興味を持ちました。

昨日、家族に「明日、社会教育委員会議に出る」という話をしたのですが、生涯学習について聞いてみると、「育児・家事等に忙しく、新しく何かを始めるのは難しい」と言われました。

現代人が様々な役割を持ち、その優先順位を設定する中で、生涯学習という分野は抜け落ちてしまいがちです。しかし佐野委員のおっしゃるように、ライフステージの中で社会や生涯学習とつながる機会はきっと訪れますので、その間口をどうすれば広げられるだろうかと思いました。

私自身も子どもを通して地域とつながる部分がありますが、そのつながりを広げるためにはどうしたらいいか。あるいはもし子どもがいなかったとしても、どのようにつながりをもつことができるだろうか。生涯学習を通じた地域とのつながりについて、深めていくことができればと思います。

2点目として、既に生涯学習の意識が高い方々へのヒアリングも非常に有効ですが、学習活動に参加していない人や、今まで興味がなかったが新しく学習活動に参加し

てみたという人に、その参加したきっかけを聞いて、議論を広げていくのも良いのではないのでしょうか。

3点目。今回のテーマを第11期社会教育委員会議の提言とよりリンクする形で検討が進められると良いと思います。こちらは素晴らしい提言で共感する部分も多いのですが、実現するための評価指標や達成目標がもう少し具体化されると良いと感じます。

例えば「働く世代の市民に生涯学習を届けるために」というテーマに対し、さいたま市民の働く世代のうちの何割が、どういうイメージで生涯学習に関わっていく像が理想的なのか。生涯学習ビジョン実現のマイルストーンを示せないのでしょうか。

<議長>

今の社会状況で、どうしても自分の生活で精一杯になっている人が多く、学ぶことの優先順位が低くなってしまふ。我々としてはそういう人にこそ学びに触れて欲しいのですが、そのきっかけをどのように作るか。実際にきっかけを掴んだ人に聞くのも有効だと思います。

また、評価指標や達成目標の明確化は大事なことです。将来、新しい生涯学習ビジョンを策定することに向けた提言も今回意識して取組むのも良いかもしれません

<今川委員>

私もこの「働く世代の市民に生涯学習を届けるために」というテーマに大きな方向性では賛成なのですが、一部に違和感がありました。

委員の皆様のお話を聞いて気づいたのが、生涯学習が働く世代とは別の場所に存在している印象を受けるのではないかということです。私自身の理解では、生涯学習とは生き方そのものだと思っています。働く世代の人たちは必ずしも生涯学習と遠い場所にいるわけではなくて、例えば私の参加するNPOの活動では様々な世代の人たちが自身の持つ知識や経験を持ち寄って、個人の成長・輪の成長・まちの成長につながる活躍をしています。普段の活動にプラスして新しく生涯学習をやって欲しいという話ではなく、働く世代の人たちが自身の経験を通して、どう生涯学習に結びつくのが大事なのではないのでしょうか。

働く世代が仕事や子育てなど様々なことに取組むことは自分自身の成長につながっていて、それが個人だけではなく例えばPTAのように社会と一緒に取組んでいる人たちにつながる。ただし、現状そのつながりが少し薄いようには感じています。「届く」というのは、自分がそれで成長している、社会のためになっている、それがまちづくりにつながる実感を持つことではないのでしょうか。

必ずしも働く世代が生涯学習に携わってないのではなく、生涯学習は生き方そのものだと思うので、どうやってその中に自分たちがいることを実感してもらうかということが「届ける」ことだという印象を持ちました。

例えば私の住む近隣の小学校では星空観測会があり、400人規模の学校なのに250人ぐらいの参加があるそうです。なぜそんなに参加率がいいのかというと、望遠鏡を何台も持ち込んでくれるような熱意を持ったコアとなる方がいて、それをつなぐ地域

の方々が出て、それに対して理解するPTAの方々などが上手に連携している姿がありました。

他にもそういった取組みはたくさんありますが、成功した事例に共通しているのは、参画者が自分自身の能力で活躍できていることと、例えば子どもたちのためになるとか、社会のためになるとかの循環を当事者が実感していることです。それは誰かから「届けて」もらったことではなく、その場で生まれたものだという印象があります。

そこが気になるので、「生涯学習を持ってない人たちにそれを渡そうよ」みたいな方向性だと理想が空回りしてしまう気がします。今、自分の生活を成り立たせるために頑張っている世代の人たち自身がすでに社会の一員であり、社会を構成して役に立っていることを実感しながら、自己肯定感やその価値を見える化していくことが重要ではないでしょうか。

<加藤委員>

私も生涯学習を「届ける」というところに違和感を持っておりました。今のお話を伺いながら、生涯学習ビジョンにも成長という言葉が使われているので、「生涯学習を通して働く世代の市民の成長を目指して」とか、成長という視点が入ると良いのではないかと思います。

また、「働く世代」と言うと何となく働いている人でなければならないイメージがあります。先ほどの国の答申を見ると「社会人の学び直し」という内容があるので、働いていてもキャリアアップのために学びたい、あるいは今は働いてないけれどキャリアをつけて仕事につなげたいという人に向けた視点も入ると、働く人たちが輝くことに資するのではないかと考えました。

もう1点、先ほど目標ある程度定めた方がいいというお話がありましたが、数値目標で測るよりは、先ほどの提言にもロールモデルという話があったので、今回私たちが目指しているものをモデルとして示せると良いのではないかと思います。

<議長>

「届ける」という表現へのご意見をいただきました。事務局としても「届ける」に込めた思いはおそらく同様かと思います。第11期もどうやって多くの市民に生涯学習ビジョンを理解していただいて学びの循環に入ってもらおうかという議論があり、その意味で「届ける」という表現が使われたのでしょうか。しかし、おっしゃるように自分がやっていることと生涯学習は別のもので、それは届けられる、与えられるものというイメージを持たれることは確かにありますので、表現を工夫していきたいと思います。

また「働く世代」という定義も現在かなり多様化しております。現実に働いている人もいれば、働くことと何かを両立されている方、働くための準備をしている方などもありますので、このイメージも、議論を通して具体化していきたいと思います。

<事務局>

皆様のご意見を反映し、さらに議論を重ねる中で最終的な表題を決定していきたい

と思います。また、次回会議までの間に、メール等で皆様のご意見をお伺いいたしますので、ご協力をお願いいたします。

<吉沢委員>

様々なご意見が出た中で、今川委員のおっしゃったことに共感しました。

社会の構造が変容する中で、企業内でもリスクリングが行われていて、例えばコーポレート・ベンチャー・キャピタルのように、起業してリスクリングした内容を自分で生かしていこうという話もあります。これは企業としても個人としても利益につながる話なので、モチベーションの高め方があるかと思います。

一方でまさに今川さんのおっしゃったような自己肯定感や、社会に関わるという生涯学習のモチベーションのあり方は非常に次元が高く、そこに直接的な利益はありません。私の地元の自治会コミュニティには各地区の運動会があるのですが、私がいる自治会が16連覇くらいしています。なぜそんなに強いのかというと、働く世代の人たちがコミュニティの輪に知り合いをどんどん入れてくるからだと思います。やはりコアになる人がいて、まさに今川委員おっしゃったことを体現していると感じました。

こういうつながりを非常に大事だと思ったときに、「届ける」というよりもむしろ生涯学習に「馴染む」ためにという視点が大事なのかと思った次第です。

<議長>

ぜひそのコミュニティの秘訣をお聞きしたいところです。

テーマの表題には検討の余地があると思いますが、考えていく題材としては皆様の合意が得られましたので、それも含め進めていきたいと思います。

本日も活発な議論いただきましてありがとうございました。次回は具体的な課題と、それから進め方として、例えば視察先のアイデア等も含めご意見いただきたいと思います。

6 連 絡

さいたま市生涯学習フェスティバル及びさいたま市生涯学習学びのネットワークについて、実施内容を報告した。

7 閉 会

以上